

初 め て の イ ン ズ え っ ち





ある暑い夏の日…
皆とレッスンをしていたはずの
こずえが一人で俺の仕事部屋に来た

「ぶろでゅーちゅー…」

真夏の中のレッスンなのだろう
こずえは全身汗だくの状態だった
こずえからは普段とは違う汗の匂いがする

「こずえ…おっぱい…
いたい…」

…聞き間違いだろうか？
「おっぱいが痛い」
こずえは自分の胸をさすり、
そう言いながら俺の前に立っていた



こずえは自分の胸…というより
乳首を摘まみながら苦しそうに
俺に訴えかけてきた

「ちょっとまえから…こりこり…するの…
がまんしてたけど…だんすのれっすんしてたら…
こずれて…いたくなった…」

「ぶろでゅーさー…
こずえのおっぱい…なおして…」

むぎゅ…
♡

こりこりする…こずえは成長が他の子より遅いから
まだ来ないだろうと思っていたが、
おそらく第二次性徴に伴う乳腺の発達によるものだろう
こずえもちゃんと女性の身体になろうと
しているということだ

いつもは子ども特有のミルクのような、
甘い匂いをしているこずえからは
到底考えられない匂い…
発情したメスの匂いが俺の部屋に
広がり始めた



こずえはトロンとした表情をして
俺を見つめていた…。
おそらくレッスンの疲れや夏の暑さも
原因の一つだろうが、明らかに
いつものものとは別のそれだった

「ねえ…」

それなのに彼女は俺の部屋に訪れている

「きゅん…きゅん…きゅん…」

こずえは賢い子だから本当は
乳首の痛みの原因もわかって
いるだろうし
雪美や他の子に相談せず、
女性なら
千尋さんもいたはずだ…

こずえが自分の服をたくし上げた
俺は無言で頷き、
彼女を自分の部屋に招き入れ
鍵をかけた



仮眠室へこずえを連れ込み
一緒にベッドに座らせた
こずえは一切の抵抗も戸惑いもなく
それを受け入れ、俺に身体を委ねていた

こずえの乳房はやはり小さい…かなり小さいが
かすかに「女」を感じる
男に触られたことも、ましては自分でも
ほとんど触ったことがないはずだ
色素は薄く、とても綺麗で無垢なものだった

しばらくすると
いつもは静かな俺の部屋で
こずえの声が漏れ始めた…

こずえの乳房、匂い、声、心地よい体温…
そのすべてが俺を興奮させ、
オスへと変えていった…



少しずつ少しずつ…
だが確実にこずえの乳首を揉む力を
増やしていった…

こずえ…俺の大事な…一番大切に育ててきた
担当アイドル…
それが今、俺の腕の中で女に変わっていつている

こずえのメスの匂いがどんどん強くなり
こずえも声を出すことに抵抗がなくなってきた
天使のような甘い声がメスのものにならっていく…

こずえの乳首は完全に勃起し、
まるでせかすかのように
俺にもっと触って、いじめと
訴えかけてくるようだった

もう後戻りはできな…

自然と俺の手はこずえの女の子の
箇所へと伸びていた

こずえのものはぷっくりとしてて
マシユマロのようにやわらかく
とても熱くなっていた

今まで誰も触れたことがない
こずえのそれは完全に閉じていたが
触ってみると粘度が高い汁があふれ出ていた

こずえの女としての準備が整うに
つられるかのように
俺のイチモツも衣服の中で痛いぐらいに
膨れ上がっていた

こずえは一心に俺のものを見つめ、
本能なのか押し付けるかのように
腰を揺らし始めた

俺たちは互いに何も言わずに
見つめ合いながら
衣服を脱ぎ始めた…



こずえの頭を撫でると自ら
俺のちんぽを掴みこちら見つめてきた

いつもはマイクを握っている
その手はとても小さく
夏の暑さでほのかに温かい

匂いを嗅いでいるのか、俺の許可を待っているのか
こずえは動かず吐息だけが激しくなっていた

少女の股下からとてつもなく
きつめの濃いメスの匂いがしてくる

ぼたぼたとオスを受け入れるための
愛汁が溢れ、性交を促していた

普段のこずえからは考えられないような
妖美な女の顔がそこにあった
艶めかしい小さな口からは吐息が溢れ
ちんぽに触れる度に興奮と硬さが増していく



こずえを見つめ返すと
こずえはちんぽを舐め始めた
まるでご主人様にご奉仕するかのよう
に大好きなぬいぐるみを撫でるかのよう
に丁寧にやさしく男根を舐めていく

こずえは何事も覚えがよいので
最初はぎこちなかった手コキや舌フェラも
すぐに上達していき、
射精感がぐつぐつと高まっていった
金玉で精子が作られているのがわかる

「もっと激しくしていい」と伝えると
裏筋から金玉まで
隅々まで舐め上げていった

愛おしそうにちんぽを舐めまわす
年端も行かない小さな少女の頭を撫でると
背徳感が迫ってきて、よりちんぽを硬くした



こずえの愛らしい小さな口が
俺のグロテスクなちんぽを咥え込む
その成長途中の小さな身体には
成人男性のイチモツは大きく、
先っぽだけを必死にしゃぶりついている

ステージの上では甘い歌声が流れる
その小さな穴からは
ベッドの上ではびちゃびちゃ、じゅぽじゅぽと
下品な音が聞こえてくる

慣れできたこずえは亀頭だけでなく
裏筋を舌で舐めたり、
玉の方も揉み上げるように
ご奉仕を始めた

乳首を再度いじってみてもちんぽへのご奉仕は
休まることはなく、ひたすらその小さな身体を
前後に動かしていた

こずえに射精管理をされているようで
俺はより興奮している

ここに今自分が欲しいものが
詰まっていると
本能が告げているのだろうか

射精感が高まり、びくびくとちんぽが
震えたがこずえは止める気配はなく
行為はより激しくなった



こずえの小さな頭を両手で掴み込み
愛すべき担当アイドルの口に
思いっきり射精した

どくどくどくと
聞こえてきそうほどの
激しい射精

出している側から玉の中で
どんどん精子が生産され
射精が収まらない

こずえは小さな口に収まり切れない
大量の精液を涙を浮かべながらも
必死に飲んでいる

逆流した精液が鼻から垂れている
アイドル、いやこの年齢の子が決して
してはいけない下品な顔
興奮が止まらない

「きゅ……きゅ……と
こずえの喉から精液を飲み込んでいる
音がいやらしく聞こえる

咄嗟に手で押さえてしまったが
こずえ自身ちんぽを離そうとせず
長い射精が終わるまで
終始啜えたままだった



こずえを再びベッドに寝かせ、
こずえの一番大事なところに手を伸ばした

少女のそれは既にびしょびしょに
濡れていて、広げると一気に愛汁が
溢れ、ベッドを濡らした

こずえのまんこはものすごく熱かった
指が触れるだけ火傷しそうだ
夏の暑さのせいもあるだろうが子〇も特有の
体温の高さもあるかもしれない

ひくひくと開いたり閉じたりしている
穴の奥を覗くと、こずえの処女膜があった
ピンク色でとても綺麗だ

色素はとても薄いのが
しつかりとしたメスの匂いと
汗の匂いが鼻を刺す

今からこれに自分のちんぽを挿入して
突き破る、こずえの初めてを貰えたと
考えるといってもたってもいられなかった



こずえの綺麗な割れ目に
明らかにサイズ差がある
自分の肉棒を押し付ける

「あっ…」とこずえの声が漏れた
改めて見直すとこずえの身体は幼すぎる
だがその事実が逆に俺を興奮させていく

先っぽで愛撫すると
まるでこずえに「おいで…」
と言われるかのように
膣内からはどんどん愛汁が溢れだしてきた

ぐぐぐ…

こずえが愛おしそうに見つめる中
さきっぽを挿入していく

きつく狭すぎるその穴は
初めての異物を受け入れ始める

くちくちくち…

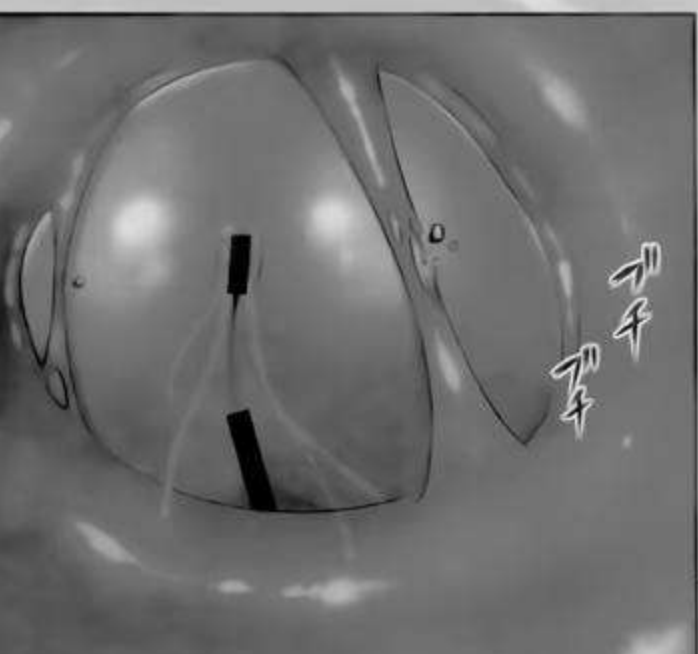
あゝ

おらん…♡

くちくち…

アチアチ

すぐに何かの抵抗を感じたが
その後すぐに「ぶちっ」とした
何かが破れる感触を感じた



挿入った
夢にも見た、年端も行かない
小○生担当アイドルへの挿入

こずえの膣内は火傷しそうなほど熱く
食いちぎられるように狭く締め付けてくるが
粘膜は優しくが絡みついてくる

ついに手を出してしまった
そんな罪悪感はなく
挿入回から綺麗な赤い液体が流れるている、
こずえの初めての男になった、
その事実に興奮が止まることはなく
ちんぽはより硬さを増していた

この雌を孕ませたい
子どもを仕込みたい
めちやくちやに犯したい

こずえは破瓜の痛みからか
初めて体験する感覚のせいか
声を発さず涙を浮かべたその瞳で
こちらをじっと見つめていた

引き込まれるようなその瞳は
俺の欲望を掻き立てるのには
十分すぎる艶めかしさを放っていた

今こ目の前にいるのは
アイドルでも子○もでもなく
欲情した二匹の雌だと認識させられる

「こずえ…大丈夫か？」
呼吸が苦しそうなこずえに声をかける

「ふわぁ…おまたいたいの…ね…」

まだ〇二歳の少女だ
男を受け入れる準備もできていないはずだ
少しでも痛みが和らぐよう
頬を撫でる

「ぶろでゅーさー…こずえの
んじにいるのー…？」

意識してやっているのか
膣内が絡みついできて
絞まりをあげていく

すり…すり…
♡♡♡

ポコッ…

ぐっ♡

ぢぢぢ♡

ぐぐ…♡

「ふわぁ…ぴくぴくしてるー…？
かわいいねー…♡」

今回はここまでにするべきかと思ったが
こずえが愛おしそうにちんぽで押し上げられ
子宮が浮き出ている自分のお腹をさすった

すごい勢いで射精感が引き上げられる
こずえの将来を考えると
流石に中出しは避けなければと
一度行為を中断を試みる

「あれえ……？」

「しろいおしっこ……ださないのー……？」

「なんでー……？」

「あかちゃん……つくろー……？」



こずえの囁きに俺は我慢できず
腰を動かし始め、すぐに
どろどろとした己の欲望を
膣内に吐き出した

ビクビク♡

どろどろ♡
どろどろ♡
どろどろ♡
どろどろ♡

腰が止まらない…
射精も一向に止まる気配がない

ぽっ♡
ぽっ♡
ぽっ♡

ドクドク♡

ドクドク♡

ドクドク♡

ドクドク♡

どくどくと濁った白濁液が
少女の身体に注がれていく

己の遺伝子をこの子に刻み込みたいと
精子をどんどん量産し、
小さな肉穴に打ち込んでいく

びゅ♡
びゅ♡
びゅ♡

びゅ♡
びゅ♡
びゅ♡

どろどろとした精液は
小さなこずえの子宮には入りきらず
既にベッドにこぼれ始めていた

それでも止めることはできず、
高まった性欲は収まるどころか
かろうじてつなぎ留めていた
理性は射精とともに吐き出され
頭にはこの雌を孕ませると言う
言葉しか残っていなかった

犬の交尾のように後ろからこずえを攻め立てると
こずえは獣のように下品な声を上げ始めた
後ろからの行為はまだ苦手なのだろうか
普段の甘い声とのギャップが俺を興奮させる

こずえの膣内は中出した精液と
こずえ自身の愛液でぐちよ…ぐちよ…と
卑猥な音を立て続け、
突く度ににどんとん具合がよくなっていった

密着してこずえの髪の毛を嗅ぐと
いつもシャンプーのような甘い匂いがする
ふわふわの髪からは発情した雌臭が絶えず溢れていた

こずえはどうやらキスすることが
好きなようで
何回も行為を重ねてゐるうちに自分から
キスを求めてくるようになった

最初は可愛らしい唇を重ねるだけのものだったが
次第に積極的になりディープキスも求め始め、
最後には自らペロチューをしてきた

小さな子〇も舌から考えられないような
卑猥な舌使いがぐちよぐちよと音を立て、
舌を絡めてくる

余裕ができたのか、こずえは腕で
俺の顔を寄せキスを求め、さらには
自ら激しく腰を動かし始めた

上の穴でも下の穴でも
執拗に俺の体液を搾りとりとうとする
小さなサキュバスの姿がそこにはあった

「ぷろでゅーさー…もっどー…♥」
さっきまで処女だったはずのこずえは
何回も身体を重ねているうちに
いつのまにかセックスを楽しむようになっていた

乳首はピンピンに勃起し、快楽を求めて、
小さい膣はこれでもかとちんぽを
絞めつけてくる

「しろいおしっこ…だせー…♥」

「ほらあ…びゅーびゅー…♥」

いつの間にか主導権は完全に
こずえのものになっていた
この時の俺はひたすら無心に腰を降り、
いかにこずえを気持ちよくさせるかしか
考えていなかった

「せのぐす…きもちいいね…
ぷろでゅーさー…♥」

「あ…あ…あ…あ…あ…♥」



どのぐらい時間がたったかわからないほど
こずえと行為を続けた
最後はこずえが自らまたがり
積極的にちんぽをしごく

「ぶろでゅーさー……こずえのおまんこ
きもちいい……?♥」

「しろいおしっこ……でそう……?♥」

「ぴゅー……どぴゅー……って
だそー……?♥」

はっ

はっ

グッ

パン

パン

パン

ニキョッ

ニキョッ

パン

パン

はっ

グッ

こずえが男を欲情させるような
艶めかしい台詞を淡々とささやいてくる

演技や誰かものまねではなく
本能で男の精子を生産させる

非常に心地が良い重さの肉穴が
精子を搾り取るために上下に揺れ踊る
華やかなステージの上ではなく
好きな男の上で……

必死にこずえのお尻を突き上げたが
それ以上にこずえの腰使いがえぐく
ステーションでのキレイキレイのダンスのように
激しく踊り狂う

「ほらあ…だせー…♥」

「ぴくぴくしてるねー…♥」

「いいよー…?こずえのなかに…
いっぱいちょーだい…?♥」

「がまんしなくていいよー…♥」

「だしてー…だせー…♥」

決して子種を逃がさまいと上の穴も塞がれ
ラストスパートに向け、より腰使いの
激しさが増す



男根を一番奥にまで咥え込み
びゅるると音を立てるように
未熟な子宮に大量の精液が流れ込んだ

あ…

あま…

トク…

あま…

こずえの小さいお腹が
精液で押し出され
みるみる膨らんでいく

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

あま…

あま…

どくどくと止まる気配のない射精
勢いは衰えることなく
最愛の担当アイドルに中出しをしたという
充実感と幸福感が満たされていた

こずえは「あっ…あっ…」と
甘いあえぎ声を出し、
のけ反りながら必死に
白濁液を飲み込もうとする

あま…

トク…

「ふわぁ…おわったー!…?」
こずえの膣から大量の精液があふれ出る
可愛らしいお腹は精液でポテっとしていた

「おなか…たふたふだねえ…」

そう言ってこずえは母親のように
優しく自らのお腹をさすった
自分の中に注がれている子種が
自分の赤ちゃんになると
わかっているかのようにだった

「あー…まだでてるー…
まだ…するー!…?♥」

たふたふ♥

もう入らないとわかっていながら
一滴でも多くこずえに注ぎたいと
射精は長く続いた

ふんふん…♥

ふんふん…♥

こずえ…♥

「えへー…ぷろでゅーさー…
すきー!…♥」

まだ彼女との夜は続く…

ミロロロ…♥

すいすい…♥

あの日からこずえとの秘密の関係は続いた
胸が痛むときはもちろんだが
すでにそれは関係なく、こずえは俺の部屋を訪れる…

『ぶろでゅーち…じゅー…♡』



部屋の扉が開き、そこには
発情した雌猫がフェロモン発し、
股間を濡らしながら立っていた

俺は無言で頷き飼い猫を
自分の部屋に招き入れるのだった

成長しているお腹を見つめながら…

初
め
て
の
一
ず
え
ち



あとがき

汗だくこずえっちはいいぞ。。。。

奥付

誌名：はじめてのこずえっち

PN：星空ミコト

印刷所：株式会社サングループ様

発行日：2024/8/12 コミックマーケット104

pixiv：458455

X (twitter)：hosizora_mikoto

無断転載/未成年者の購読/WEBへのアップロードを禁じます。



BlueShachi